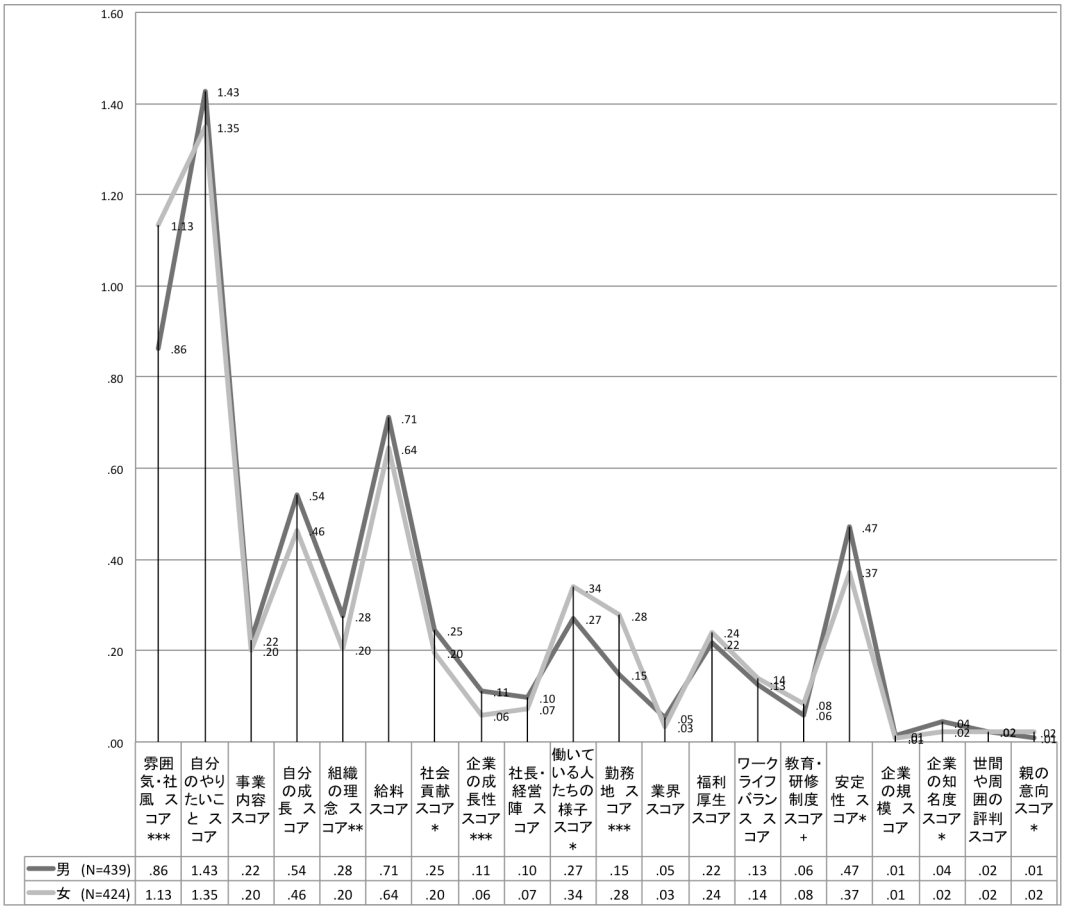
２）分析結果

ここからはテーマごとにデータ分析を行った結果について報告する。

①働くことに対する考え方から見えてくること

就労観の分析を進めるにあたり、就職先を選ぶ基準から検証するため、就職先の選択基準として重要視する点の上位３位までをたずねたＱ３をスコア化することとした。①～⑳の選択項目それぞれについて、１位に選択された場合には３点、２位の場合は２点、３位の場合は 1 点、選択されなかった場合には０点として、回答者一人ずつ①～⑳の選択項目のスコアを算出した。（原則として、ひとつの項目は２度選択されることはないが、回答者の中でたとえば１位と３位で同じものを選択した場合があった。）

図-①-１　就職先選択基準の項目ごとのスコアの男女による違い

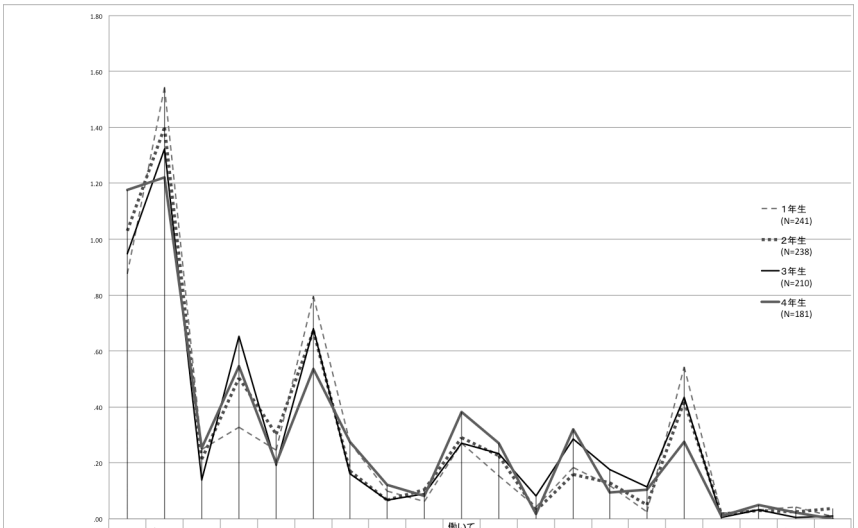


	雰囲気・社風スコア***	自分のやりたいことスコア	事業内容スコア	自分の成長スコア	組織の理念スコア**	給料スコア	社会貢献スコア*	企業の成長性スコア***	社長・経営陣スコア	働いている人たちの様子スコア*	勤務地スコア***	業界スコア	福利厚生スコア	ワークライフバランススコア	教育・研修制度スコア+	安定性スコア*	企業の規模スコア	企業の知名度スコア*	世間や周囲の評判スコア	親の意向スコア*
男 (N=439)	.86	1.43	.22	.54	.28	.71	.25	.11	.10	.27	.15	.05	.22	.13	.06	.47	.01	.04	.02	.01
女 (N=424)	1.13	1.35	.20	.46	.20	.64	.20	.06	.07	.34	.28	.03	.24	.14	.08	.37	.01	.02	.02	.02

注）t-検定を用いて比較。t-値に関して有意確率（両側）が***: p<.001, **:p<.01, *:p<.05, +:p~=.05。

男女とも、「自分のやりたいことができるか（以下、自分のやりたいこと）」どうかを最も重要視していることがわかる。「雰囲気・社風」「給料」「自分が成長できるかどうか（以下、自分の成長）」が続く。女子のスコアが有意に高いのは、「雰囲気・社風」(1.13)、「働いている人たちの様子」(0.34)、「勤務地」など働く環境に関連するものであった。一方、男子が高かったのは、「組織の理念」(0.28)、「社会貢献」(0.25)、「企業の成長性」(0.11)、「安定性」(0.47)、「知名度」(0.04) であり、男女間の就職先の選択基準の違いが顕著に表れた結果となった。

図-①-２　就職先選択基準の項目ごとのスコアの学年による違い

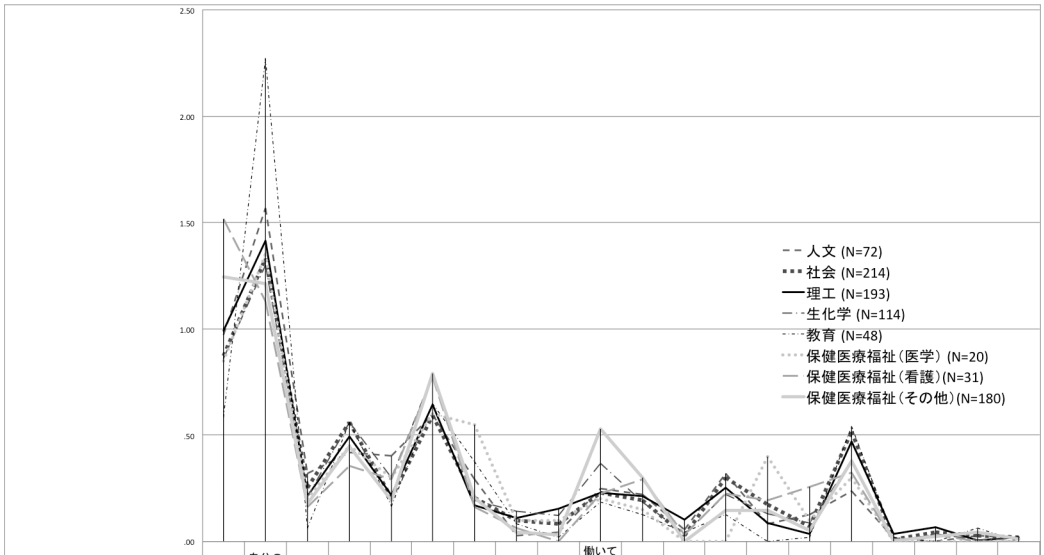


	雰囲気・社風 スコア	自分のやりたいこと スコア	事業内容 スコア	自分の成長 スコア**	組織の理念 スコア	給料 スコア*	社会貢献 スコア	企業の成長性スコア	社長・経営陣 スコア	働いている人たちの様子 スコア	勤務地スコア	業界 スコア	福利厚生 スコア	ワークライフバランス スコア	教育・研修制度スコア*	安定性スコア	企業の規模 スコア*	企業の知名度スコア*	世間や周囲の評判 スコア	親の意向 スコア
1年生 (N=241)	.88	1.54	.25	.33	.24	.80	.27	.10	.06	.27	.15	.04	.18	.12	.02	.54	.02	.03	.04	.01
2年生 (N=238)	1.03	1.40	.21	.50	.30	.67	.17	.07	.11	.29	.23	.03	.16	.13	.05	.42	.02	.03	.03	.04
3年生 (N=210)	.95	1.32	.14	.65	.19	.68	.16	.07	.09	.27	.23	.08	.29	.18	.11	.43	.00	.03	.00	.01
4年生(N=181)	1.18	1.22	.25	.55	.20	.54	.28	.12	.08	.38	.27	.02	.32	.09	.10	.28	.01	.05	.02	.00

注）一元配置分散分析を用いて比較。F-値に関して有意確率（両側）が**:p<.01, *:p<.05,。

学年間のスコアの差をみていると、有意な差がみられた項目は、まず「自分の成長」で３年生（0.65）が高く１年生（0.33）が低い。「給料」では１年生（0.80）が高く、４年生（0.54）が低い。「教育・研修制度」では３年生（0.1）が高く、１年生（0.02）が低い。企業の規模および知名度でも非常に小さいが統計的に有意な差があった。

図-①-3　就職先選択基準の項目ごとのスコアの専攻による違い

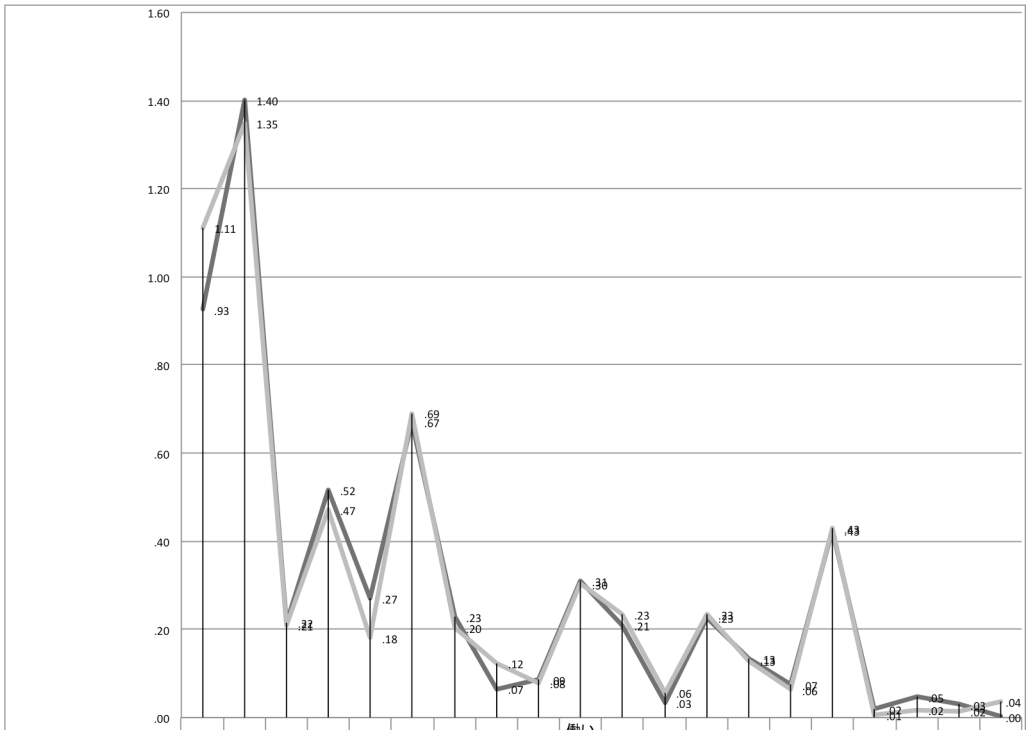


	雰囲気・社風 スコア**	自分のやりたいこと スコア***	事業内容 スコア	自分の成長 スコア	組織の理念 スコア	給料 スコア	社会貢献 スコア	企業の成長性 スコア	社長・経営陣 スコア	働いている人たちの様子 スコア**	勤務地 スコア	業界 スコア	福利厚生 スコア	ワークライフバランス スコア	教育・研修制度 スコア+	安定性 スコア	企業の規模 スコア	企業の知名度 スコア	世間や周囲の評判 スコア	親の意向 スコア
人文 (N=72)	.97	1.57	.32	.42	.40	.60	.29	.03	.04	.25	.22	.06	.32	.08	.13	.24	.01	.00	.03	.01
社会 (N=214)	.87	1.33	.25	.56	.21	.59	.21	.10	.08	.23	.19	.03	.30	.17	.07	.52	.01	.04	.03	.02
理工 (N=193)	.99	1.41	.21	.49	.22	.64	.17	.11	.16	.23	.21	.10	.25	.09	.04	.47	.04	.07	.01	.02
生化学 (N=114)	.86	1.30	.21	.56	.30	.78	.19	.14	.12	.37	.18	.04	.22	.13	.09	.38	.00	.04	.01	.02
教育 (N=48)	.58	2.27	.06	.56	.17	.65	.38	.08	.02	.19	.13	.04	.13	.00	.02	.54	.02	.00	.06	.00
保健医療福祉（医学） (N=20)	.85	1.35	.20	.45	.30	.60	.55	.10	.10	.20	.15	.00	.00	.40	.10	.30	.00	.00	.00	.00
保健医療福祉（看護）(N=31)	1.52	1.13	.16	.35	.29	.77	.16	.06	.00	.23	.29	.03	.23	.19	.26	.32	.00	.03	.00	.00
保健医療福祉（その他）(N=180)	1.24	1.21	.18	.44	.19	.79	.21	.04	.03	.53	.30	.00	.14	.14	.05	.38	.01	.02	.04	.01

注）一元配置分散分析を用いて比較。F-値に関して有意確率（両側）が***: p<.001,+:p~=.05。

次に専攻間で、有意差がみられたのは、「自分のやりたいこと」で教育系（2.27）が飛び抜けて高い。「雰囲気・社風」では看護系（1.52）が高い。「働いている人たちの様子」は保健医療福祉（その他）（0.37）が最も高い。

図-①-4　就職先選択基準の項目ごとのスコアの「アルバイトしているかどうか」による違い



	雰囲気・社風スコア*	自分のやりたいことスコア	事業内容スコア	自分の成長スコア	組織の理念スコア*	給料スコア	社会貢献スコア	企業の成長性スコア	社長・経営陣スコア	働いている人たちの様子スコア	勤務地スコア	業界スコア	福利厚生スコア	ワークライフバランススコア	教育・研修制度スコア	安定性スコア	企業の規模スコア	企業の知名度スコア	世間や周囲の評判スコア	親の意向スコア*
している (N=538)	.93	1.40	.22	.52	.27	.67	.23	.07	.09	.31	.21	.03	.23	.13	.07	.43	.02	.05	.03	.00
していない (N=333)	1.11	1.35	.21	.47	.18	.69	.20	.12	.08	.30	.23	.06	.23	.13	.06	.43	.01	.02	.02	.04

注）t-検定を用いて比較。t-値に関して有意確率（両側）が**:p<.01。

アルバイトをしているかどうかでスコアに違いがあるかをみてみると、有意差がみられたのは雰囲気・社風で「していない」（1.11）が高い。組織の理念では「している」（0.27）が高い。また、親の意向は全体を通して低いが、「していない」（0.04）が高いという結果であった。

次に、大学生の就職と就労に関する考え方を捉えるために、就職先の選択基準の２０項目からの選択されたものを基に、回答者タイプ別に分類することを試みた。その方法として、第１位、２位、３位で選ぶ項目を利用して、階層的クラスタ分析[1]を用いて行った。さらに、20 項目について因子分析[2]を行い、これらの結果を合わせて選択傾向の分類を決定した。検討した結果、4 クラスタに分類することとした。対極に位置する２クラスタが、以下の２つである。

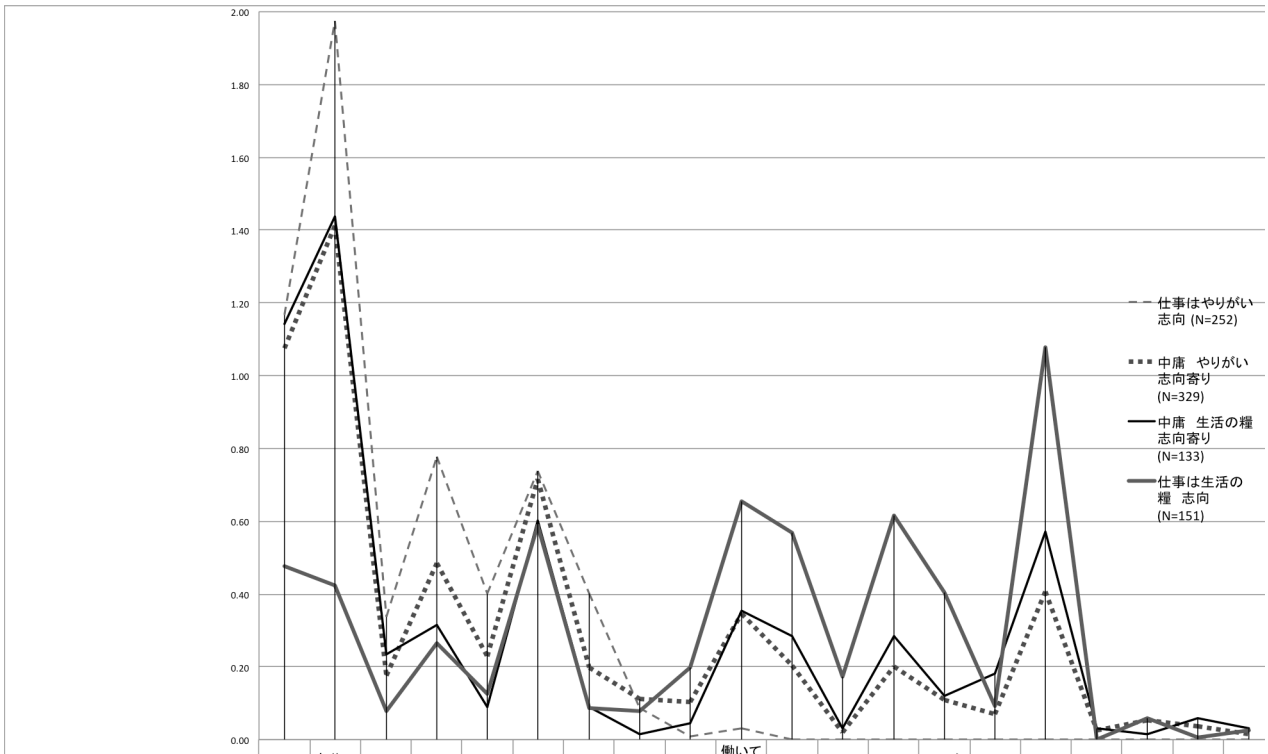
- 「仕事はやりがい」志向：仕事を通して自己実現を目指す傾向。また就職先を「組織」として認識する傾向が強い。ワークライフバランスに関連する事柄については意識が低め。
- 「仕事は生活の糧」志向：仕事は生活のためであり、心地よい環境で働き続けることを重要視する様子がうかがえる。ワークライフバランスに関する意識は高めの傾向。

この二つの対極的なクラスタに加え、中庸的な２クラスタ（やりがい志向寄りの中庸、生活の糧志向よりの中庸）を合わせて 4 クラスタ（それぞれ、252 名、329 名、133 名，151

[1] Ward 法を用いた。
[2] 最尤法、バリマックス回転を用いた。

名）となる。４クラスタについて特徴を検証してみる。

図-①-５　就職先選択基準の項目ごとのスコアの就職選択基準クラスタによる違い



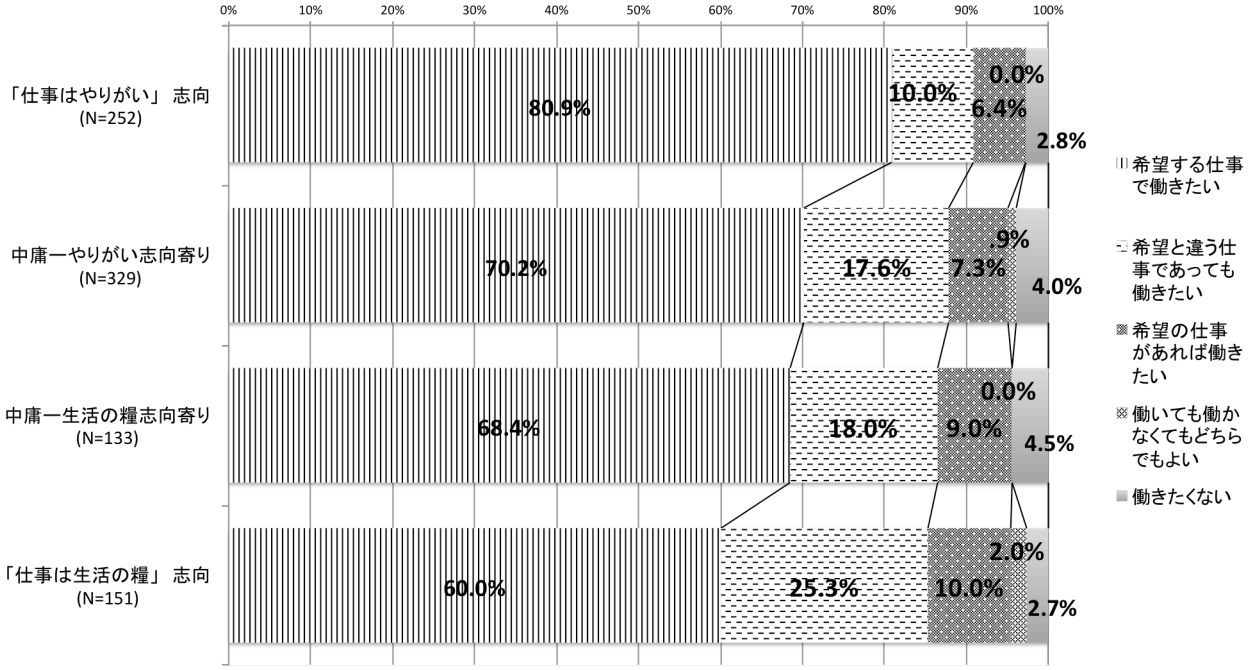
	雰囲気・社風 スコア***	自分のやりたいこと スコア***	事業内容 スコア**	自分の成長 スコア***	組織の理念 スコア***	給料 スコア	社会貢献 スコア***	企業の成長性 スコア	社長・経営陣 スコア***	働いている人たちの様子 スコア***	勤務地 スコア***	業界 スコア***	福利厚生 スコア***	ワークライフバランス スコア***	教育・研修制度 スコア***	安定性 スコア***	企業の規模 スコア*	企業の知名度 スコア*	世間や周囲の評判 スコア*	親の意向 スコア
仕事はやりがい　志向 (N=252)	1.17	1.98	0.34	0.78	0.40	0.74	0.40	0.09	0.01	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
中庸　やりがい志向寄り (N=329)	1.08	1.41	0.18	0.49	0.23	0.72	0.20	0.11	0.10	0.35	0.20	0.02	0.20	0.11	0.07	0.41	0.02	0.05	0.04	0.02
中庸　生活の糧志向寄り (N=133)	1.14	1.44	0.23	0.32	0.09	0.60	0.09	0.02	0.05	0.35	0.29	0.03	0.29	0.12	0.18	0.57	0.03	0.02	0.06	0.03
仕事は生活の糧　志向 (N=151)	0.48	0.42	0.08	0.26	0.13	0.59	0.09	0.08	0.20	0.66	0.57	0.17	0.62	0.40	0.09	1.08	0.00	0.06	0.01	0.03

注）一元配置分散分析を用いて比較。F-値に関して有意確率（両側）が***: p<.001, *:p<.05。

違いが明確になるように分類されたクラスタなので当然であるが、「給料」「企業の成長性」「企業の規模」「親の意向」をのぞき全ての項目でクラスタ間に統計的な有意差が見られた。「仕事はやりがい」志向は「自分のやりたいこと」(1.17)、「自分の成長」(0.78) が高く、「仕事は生活の糧」志向はこれらの項目については最も低いスコアである（それぞれ、0.42、0.26)。一方、「仕事は生活の糧」志向は「働いている人たちの様子」(0.66) や「勤務地」(0.57)、「福利厚生」(0.62) などが高く、これらは「仕事はやりがい」志向では非常に低い。また「仕事は生活の糧」は、「安定性」(1.08) も高く「ワークライフバランス」(0.40) のスコアも高いことから、長く働き続けることに価値を置いている様子もうかがえる。中庸の 2 クラスタについては、対極的な２クラスタの間で、それぞれ寄りがちなグループに近いところで推移していることをグラフから読み取れる。

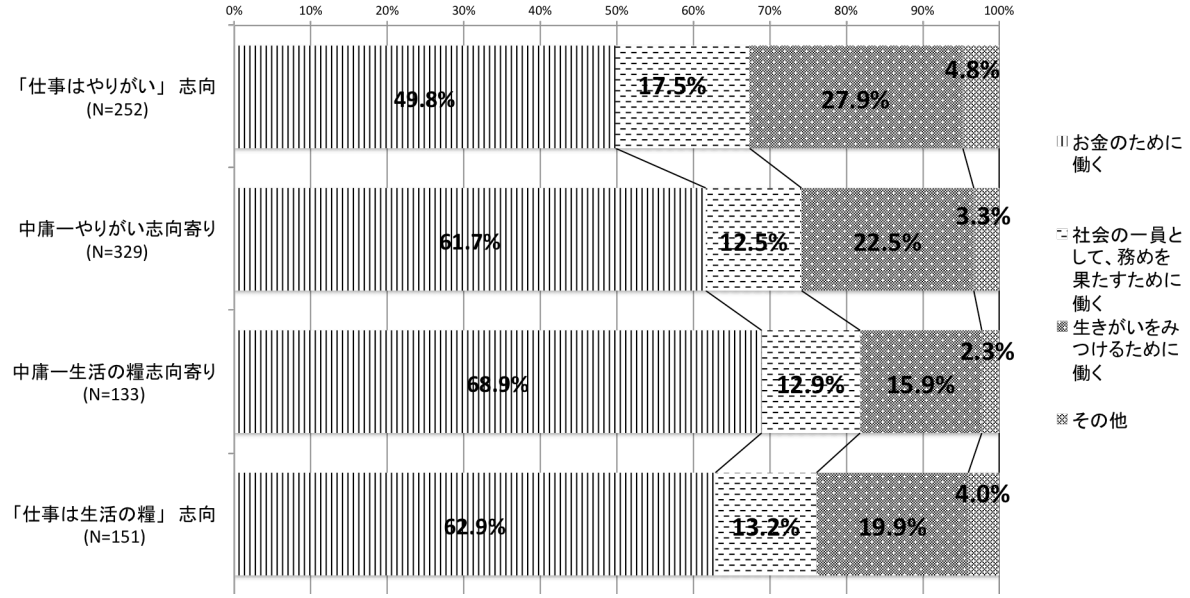
就職先選択基準の項目ごとのスコアによる違いからも、それぞれのクラスタの特徴を捉えることができる。さらに、仕事に対する考え方（Ｑ１）と働くことの目的（Ｑ２）をたずねた質問項目に対する回答をみてみることで、クラスタ間の違いを確認してみる。

図-①-6　仕事に対する考え方の就職先選択基準クラスタによる違い



注）分析にはχ２乗分析を用いた。P<.01。

図-①-7　働くことの目的の就職先選択基準クラスタによる違い

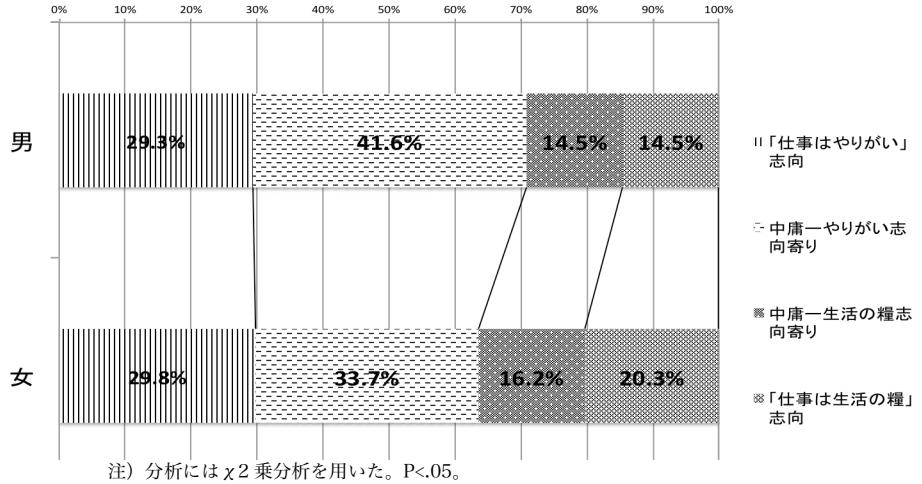


注）分析にはχ２乗分析を用いた。P<.05。

まず、上段のグラフから、仕事に対する考え方では、「仕事はやりがい」志向から「仕事は生活の糧」志向とだんだんに「希望する仕事で働きたい」という回答が減っていることが分かる。一方、希望と違う仕事であっても働きたいと言う選択は増えていく。下段の働くことの目的のグラフからは、「仕事はやりがい」志向では「お金のため」という回答はクラスタ間を比較すると最も少なく、一方「生きがいをみつけるため」に働くという回答は多かった。「仕事は生活の糧」志向は、「お金のため」という回答は次に少なく、「社会の一員として」「生きがいをみつけるため」という回答も最も少ないことはなく、働くことを冷静に当たり前のこととして現実的に捉えていると言えそうだ。

次に、各クラスタの属性的な特徴を検証してみる。

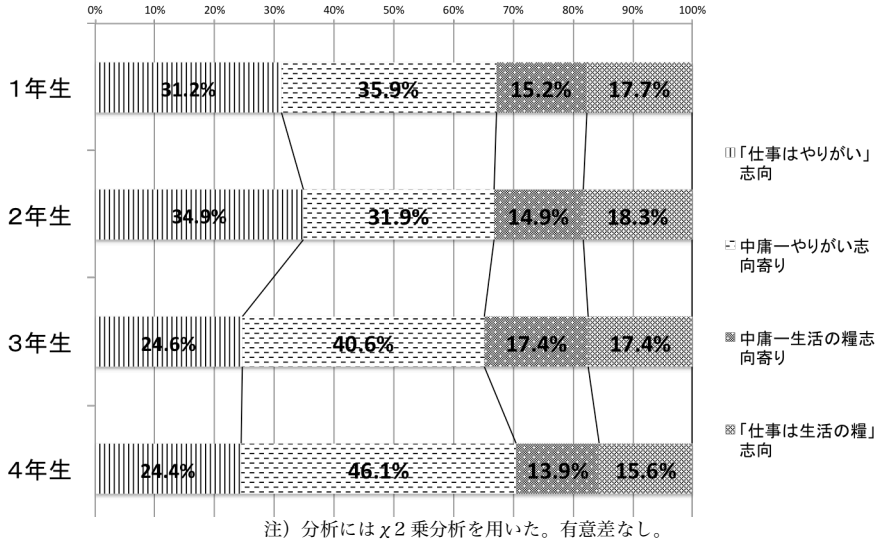
図-①-8　就職先選択基準クラスタの分布の男女の違い



注）分析にはχ２乗分析を用いた。P<.05。

性別間でクラスタの分布に有意差が見られた。女子にはやりがい志向寄りの中庸が少なく、一方「仕事は生活の糧」志向が男子より多い。

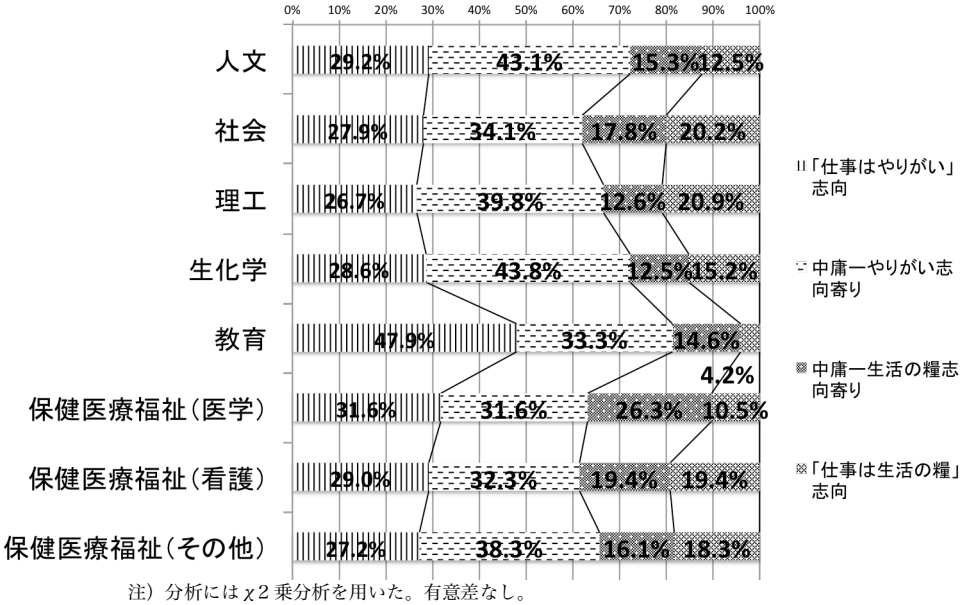
図-①-9　就職先選択基準クラスタの分布の学年による違い



注）分析にはχ２乗分析を用いた。有意差なし。

クラスタの分布で学年間に統計的な有意差は見られなかったが、学年が上がるにつれて、２つの中庸クラスタが多くなる傾向が若干見て取れる。

図-①-10　就職先選択基準クラスタの分布の専攻による違い

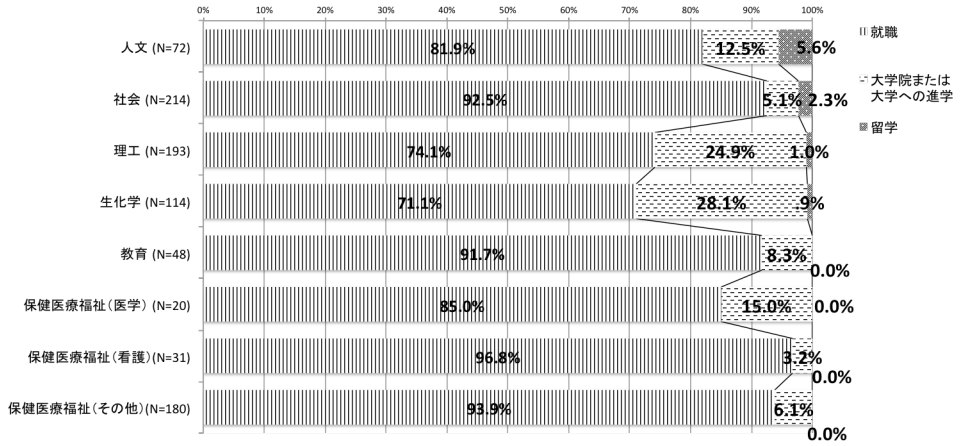


注）分析にはχ２乗分析を用いた。有意差なし。

専攻によるクラスタの分布にも、統計的な有意差は認められなかった。教育系で「仕事はやりがい」志向が非常に多いこ（47.9%）。

ここまでは、熊本県内の大学生の比較的抽象的な就職や就労に対する考え方について見てきた。このセクションの最後では、具体的な進路希望を、専攻に注目してを見てみたい。

図-①-11　専攻別の希望進路



卒業後の進路では、理工系と生化学系の大学院進学が多い(24.9%、28.1%)。専攻には語学が含まれるため、人文系では留学希望が他の専攻と比較して高いことが見て取れる(5.6%)。

就職と進学・留学を含む進路の希望地について、社会系と保健医療福祉の看護系とその他で「熊本県内」の希望が約3割を占める(32.9%、32.3%、38.9%)。一方、大学院進学希望の多い理工系と生化学系に加え、医学系では約3割が「こだわらない」という回答した(29.7%、31.6%、30.0%)。

図-①-12　専攻別の希望進路先

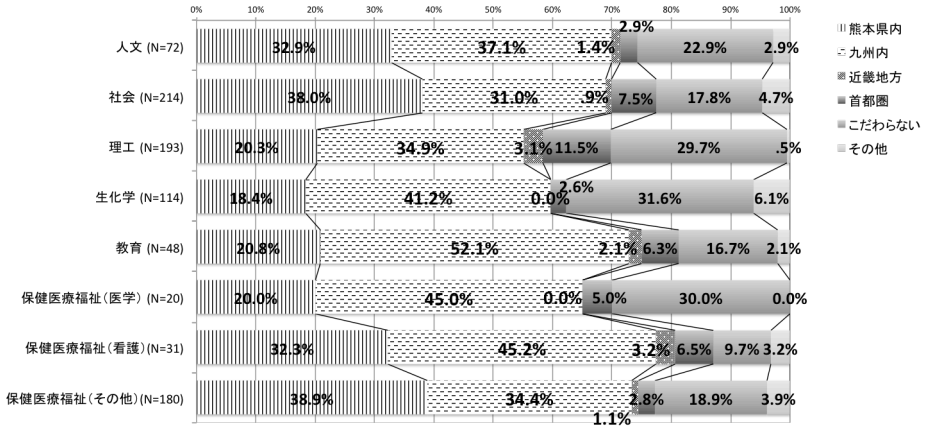


図-①-13　専攻別の希望就職先業界

	事務従事者	販売従事者	専門・技術的職業従事者	サービス従事者	農林業従事者	生産工程・労務作業者	運輸・通信従事者	水産業	農林業	鉱業
人文 (N=72)	50.0%	22.2%	43.1%	52.8%	0.0%	2.8%	4.2%	0.0%	0.0%	0.0%
社会 (N=214)	54.7%	32.2%	29.9%	44.9%	2.8%	6.1%	5.6%	1.9%	4.2%	1.4%
理工 (N=193)	18.7%	9.3%	81.9%	17.6%	3.1%	13.0%	4.7%	2.1%	6.2%	2.1%
生化学 (N=114)	24.6%	14.0%	78.9%	15.8%	14.9%	20.2%	.9%	6.1%	28.9%	3.5%
教育 (N=48)	25.0%	16.7%	56.3%	43.8%	0.0%	4.2%	6.3%	0.0%	2.1%	0.0%
保健医療福祉 (医学) (N=20)	0.0%	0.0%	95.0%	5.0%	5.0%	0.0%	0.0%	10.0%	5.0%	5.0%
保健医療福祉 (看護) (N=31)	3.2%	3.2%	74.2%	32.3%	3.2%	0.0%	0.0%	0.0%	3.2%	0.0%
保健医療福祉 (その他) (N=180)	28.3%	12.2%	67.8%	33.9%	1.1%	1.7%	1.1%	.6%	1.7%	0.0%

	建設業	製造業	電気業	ガス業	運輸業	情報通信業	商業	金融業	保険業	不動産業	その他のサービス業
人文 (N=72)	1.4%	13.9%	2.8%	1.4%	4.2%	18.1%	18.1%	15.3%	5.6%	0.0%	77.8%
社会 (N=214)	7.0%	17.8%	6.1%	4.2%	7.0%	17.3%	36.4%	31.3%	13.1%	8.4%	44.4%
理工 (N=193)	28.5%	36.8%	19.2%	4.1%	3.6%	26.4%	14.0%	7.3%	1.0%	4.7%	19.7%
生化学 (N=114)	2.6%	50.9%	6.1%	3.5%	.9%	5.3%	14.9%	2.6%	2.6%	1.8%	40.4%
教育 (N=48)	0.0%	12.5%	0.0%	0.0%	6.3%	4.2%	20.8%	16.7%	8.3%	4.2%	85.4%
保健医療福祉 (医学) (N=20)	0.0%	0.0%	5.0%	5.0%	5.0%	0.0%	5.0%	5.0%	5.0%	0.0%	90.0%
保健医療福祉 (看護) (N=31)	3.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	6.5%	0.0%	93.5%
保健医療福祉 (その他) (N=180)	.6%	7.8%	.6%	0.0%	.6%	5.6%	11.1%	3.3%	6.7%	1.7%	80.0%

全体の希望する業界の回答で、「その他のサービス業」を選択する割合が高かったのは、保健医療福祉系専攻の回答者が選択できるその他の具体的なものがなかったことが原因のようである。一般的な推測を概ね反映するように、専攻による違いが出た。専門性が高かったり、卒業後の職業が明確な理系の専攻では「専門・技術的職業」が、一般性の高い文系の専攻では、「事務」「販売」「サービス業」「金融業」が多い。